

熱さまし闇にとけゆくまでのことけたるき日差し背後にありて 草野浩一

甘き波 青き耳もと サイレンが遠くなるまで (しばらくの死を) とみいえひろこ

やみけむり

危ふきはダンスになりて遠ざかる高架下にはデュシヤンの暮し

とみいえひろこ

真昼間の中津高架をくぐりきて番人のごと闇はたちおり

草野浩一





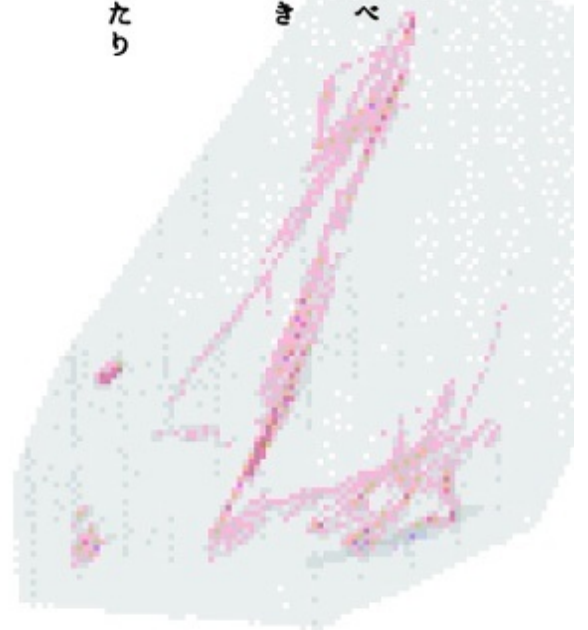
待ちてゐるしづかな煙だうとでもなることばかり流るる川へ
 ぼこぼこの十三の通りあてどなく昔のだれかのやうな顔つき
 真暗へ脚差し入れぬねつたりと高架下より風立ち上り
 全身を撃ち抜かれながら歩きませう二度とは行かぬ十三あたり



紙の上にわがペン先とせんさいな髪のなびきが影としてある
 延々と流るる川に融けてゆく素足ひたして覗とるひと
 水をわり風をさくこと橋脚はおんなの維持か首ほそくあり
 五月闇ひんやりとして少女らは狐となりて戯れており



紫陽花と別れしのちに沼に逢ふ遠くの梅田の箱ながめつつ
 あやしきもの何となく追ふ少年のふふふのけむり闇へ溶けゆく
 陽炎は座つたところに揺れてゐる或る日の梅田の向いの川へ
 洗はれてゐる右頬を預ければ始まらぬまま線路の真下





葦

「火柱は煙りの上にたつほどよ」十三西口いまだあかざり

着流しの女の蹴りたる夕焼けがカロンとひびき鳥をたたしぬ

割れ鏡むねにしのはせ橋わたり女はへわたしゝの匂いを語る

音やめば音をつくらん着流しのとみいえひろこ裾のはためく



罫

スカアバラの市にさびしき夕暮れを迫り上げゆくための爪の音

セブンスターはいつも捨てらるる川沿いの真中あたりの街で、唐突に

ささやかな憐れみ持ちて眺むれば砂と終へしことすべてのぬるさ

ずうつと左へ流るる川を見てゐたやうな気で帰る夕暮れ

葦

ひとつふたつみつつめにしてしら鷺のつばさすしく風をとらえる

形相のうつくしき首しならせて空に澄みゆく淀のしら鷺

白球をうしろにそらし少年は子犬のようにかえす踵を

幼きがあかいバットを振るときの上に乗る光やさしく

ふかふかと煙が混ちりゆく闇の右手さびしき夏までのこと
楚々とたつあまき香りの夕まぐれ曾根崎あたりで交わすゆびきり



やみけむり

二〇一四年五月 淀川 中津、十三、梅田あたり
2014.5.19

草野浩一
Twitter @kusakagerou mail:hkouchi61@gmail.com

とみいえひろ
Twitter @hirokodori blog <http://d.hatena.ne.jp/hirokotomii/>